

TS娘「お嬢様学校に行ったら処女奪われた件」

六花リンデル@TSメス堕ち信奉民

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『男である事を忘れられなくて「俺は男だ!」と言い張るバスト100越えのTS娘が親に言われて渋々、寮付きのお嬢様学校に入れさせられ、同室になったふたなり巨根生徒会長に薬を盛られた挙句にレイプされ、そのときの写真をネタに様々な羞恥プレイをさせられ、トドメにネットの生配信でメス堕ち絶頂しちゃうのを願います。』

という要望の元、書き上げました。リクエストされた方、また、私の作品をお待ちになっていた方。久方振りの私の作品をお納めください。

後編 前編

目次

30

1

前編

1

「オレは男だ！　女なんかじゃない！」

俺の声が、居間に響き渡る。

「……イブキ、もう辞めにしないか？　父さん達も、お前の為ならなんでもしてやりたいがそればかりは何にも助けになつてやれないんだよ」

「そうよ、イブキちゃん。お母さんもお父さんも、伊吹ちゃんのこと、大切な娘だつて思つてるから」

気持ち高めな可愛らしい女の子の声。俺の怒りの身振りに合わせてどたぶんっ♡と揺れてしまう大きな胸。肉付きは良いが決して筋肉質ではない滑らかな四肢。

何もかも、認められない。

困り果てた、そんな顔で見合わせる両親。迷惑をかけたいわけじゃないけど、だけど、こればかりは譲れない。

「……分かった。それなら、お前はここに入れ」

「……聖エスペランサ女学院……？」

疲れたようにため息を吐きながら、父が取り出して机の上に置いたのは『聖エスペランサ女学院』と書かれた一冊のパンフレット。

「都内でも有数のお嬢様進学校だが、幸い、お前の学力はここでも充分にやっついていける」

それはそうだ。

両親も誰も知らないが、俺は人生二周目だからな。大学生だった男

の前世を持って、美少女羽島伊吹はしまいづきとして生まれた俺だが、はつきり言って今世に敵はいないと思っっている。

しかし、何故お嬢様学校なのか。

「周りに女子しかいない環境でも、自分が男だと言い続けるなら、お父さん達ももう少し考えてみよう」

「でも、なるべく特待生で入ってね？　うち、あんまりお金は無いから

……」

「……」

正直、このままでは埒が明かないとは思っていた。

周りに女子ばかり、というのは逆に言えば必然的にハーレムみたいなものだ。それに特待生を取るのも多分行ける。

……案外、悪くは無い提案にも思えた。女子校なんて前世も今世も全く縁はなかったが、興味は少しだけある。

俺は、小さくコクリと頷くと、パンフレットを持ってリビングを後にした。

2

「じゃあ、行ってくるよ」

あの日から半年が経った。

三月の春、何の問題もなく聖エスペランサ女学院の特待生枠を獲得した俺は、聖エスペランサ女学院の冬服に身を包んで、先に送った着替え以外の荷物をまとめた鞆を提げ家を出ようとしていた。

ほぼ全額免除の特待生枠が10個もあったので、特待生を取ること自体は真面目に楽勝だった。

「一人で大丈夫？　お母さん、心配よ……」

「大丈夫だって、母さん。父さんも、またね。夏頃には帰ってくるか

ら」

「……頑張つてっいよ」

手短にそう言う父と、涙をハンカチで拭う母を後目に、俺は十五年間慣れ親しんだ我が家を後にする。

そう、聖エスペランサ女学院は全寮制なのだ。実際に見学にも行つてみたが、学院も寮も何もかもが広かった。これで、生徒数は一学年100人、200人なのだから、あまりにも贅沢過ぎる。

早朝の肌寒さの中、最寄り駅から電車で比較的都会の方へ行き、時間通りに聖エスペランサ女学院直通の県外行きバスに乗り込んだ俺。

一番後ろの端、窓側の席に座ると、ここからしばらくは揺られ続ける為、一眠りしようとイヤホンを付けて目を瞑った。

「……」

「あ、あの……」

「……？」

すると、隣に座った誰かが俺の身体を本当に小さく、控えめに揺すった。

無視するのも可哀想なので、チラリと横目を向けると、少女がヒツと声を漏らしているのが見える。そう言えば、自分の目付きがちよつとだけ悪いことを思い出した。流星にレディース程ではないが、苛立っているようには見えたくもされない。

初対面の恐らく同級生からの第一印象が悪いのは良くない。

慌てて俺はイヤホンを取って居住まいを直し、少女の方を向いた。よく見れば、美女美少女ばかりのこの世界でも目立つような整った顔立ちの気弱そうな小動物っぽい美少女だ。これは、余計に挽回しなくてはならない。

「ごめんごめん。オレってさ、目付き悪くて」

「こ、こちらこそいきなり声をかけてごめんなさい……」

あー、これは完全に怖がられちゃったな。

ナンパしてくる男相手だとめちやくちや役立つんだけど、これのせいで中学時代は女子の友達もあまり多くなかったしなあ。どうにかして関係を修復しなくては。

「オレの名前は羽島伊吹。君は？」

「羽島、伊吹さん……イブキさんですね。私は湊川真奈みなとがわです！ よ、よろしく願いますね」

マナちゃん、結構距離の詰め方が強引だな。

「それで、オレに何か用だった？」

本題に入ると、マナちゃんは一瞬躊躇いを見せるも、遠慮がちに要件を述べる。

「……あの、もしかして特待生の人だったりしません、か？」

「え？ あー、うん。そうだけど、よくわかったね」

「あ、やっぱりそうですか」

真面目に俺が特待生だなんてよく分かったものだ。

当てずっぽうじゃなくて、結構確信めいた何かを持ってそうな聞き方だったし。

俺の疑問を悟った彼女は、その理由を語り出した。

「なんて言うか、お嬢様っぽくない？ っていうのかな。それに、気品のあるとか、そんなんじゃないけど、大人の落ち着きみたいなのが あった……から」

「へえー、なるほど」

なんと言うか、マナちゃんは、こう、無自覚に核心を突いていく主人公タイプの女の子に見えた。

「私も特待生なので、お嬢様達の空気に馴染めなかったらどうしようって思ってたんですけど、イブキさんみたいな人が居てくれたら安心します」

「あ、ああうん。よろしくな」

「はい！ よろしくお願いします！」

マナちゃん……無自覚に失礼だな。

だが、何はともあれ、第一印象の挽回には成功したと見て良いだろう。マナちゃんが同じ特待生だったのは驚いたけど。

しかし、彼女の前では格好良い存在であれたら良いな、とオレはそう思うのであった。

3

5

そこからは、他愛のない談笑をしながらバスに揺られること数時間。

やっとの事で、バスは聖エスペランサ女学院に到着した。

「えっと、私の寮はこっちみたいです」

「あー、そう？ オレの寮はこっちっぽいから、ここでお別れだね」

「また、すぐ会えますよ！ それじゃあ！」

「ああ」

バスを降りて、めちやくちや広大な学院に唾然とするのもそこそこに、寮区画に辿り着いた俺達は早々にそれぞれの寮に向かうことになり、寮自体も沢山あるみたいで、なんとと言うか豪勢な雰囲気の団地みたいになっている。

自分の寮舎を見つけると、やはりと言うべきか、目の前に立つだけでも気圧されてしまいそうなあまりの豪華さに呆れながらも、エントランスから中に入る。

そう言えば、この女学院では、一、二年生が相部屋らしい。三年生のみ、三年生同士または一人部屋となるのだとか。

「えーと、409、409つと」

409号室が俺に与えられた寮室だ。一体、どんな人が相部屋となるのだろうか。

廊下ですれ違う上級生も、皆お嬢様然としていて綺麗だった。憧れはしないが、とても良いと思う。多分、特待生同士は同じ部屋にはならないだろうから、俺の相部屋の人も十中八九はお嬢様に違いない。美人は三日でなんとやら、みたいなことにならないことを祈るだけだ。

「……………」

高級感溢れる木造ドアに取り付けられた、これまた仕立ての良さそうな金属の表札に書かれた409の数字を見つめる。

この先に、俺が今年一年間苦楽を共にする人が……。

ちよつとズレた心持ちだが、俺は覚悟を決めるとドアをコンコンとノックした。

「失礼しまーす」

「開いてましてよ」

おお、凄なお嬢様っばい！

気品溢れる声に誘われて、俺はドアを開けた。

「貴女が、今年の特待生の羽島伊吹さん、ですわね？」

「……は、はい！」

まず、最初に目に入ったのは金。ブロンド。

そして、二つの美しい青。

白く綺麗に整った顔立ちに、その二つの色がどこまでも映える。

「わたくしは、さんぜんいんとウコ燦全院透子ですわ。よろしくお願い致します」

一言に言えば、俺はトウコさんから目が離せなくなった。

椅子に座りながらティーカップを手にしてにっこりと、柔らかく、美しく、麗らかに微笑むその姿は、正にお嬢様そのものだと言える。

まさか、こんなにも心が惹かれるなんて。もう、他の女子では惹かれないかもしれない。

それくらいには、衝撃的な出会いだった。

トウコさんは、手に持っていたティーカップを近くのテーブルに置くと、洗練された所作で立ち上がって俺の元へと歩いてくる。そして、少しだけ少しだけ腰を屈めて下から俺の顔を覗き込んできた。

「わたくし、此処、聖エスペランサ女学院の生徒会長を務めています。何か、困ったことがあれば言ってくださいまし」

「わ、分かりました……」

「ああ、もう。そんなに固くならないでくださいな。自然体の貴女が見たいですわ。イブキさん、とお呼びしても？」

「は、はい！ 勿論！」

そ、そう言われたら仕方が無い。

断じて、上目遣いに心を掴まれたとか、良い香りに意識が持つてかれたとか、複雑でもあるが俺よりは小さいながらも立派な胸部に目を奪われたとか、そんなことは無い。

「……もう。とはいえ、あまり急かすものでもないですものね。お話

でもしまししょうか？」

「そ、そうですね！ 喜んで！」

情けないことに緊張でガチガチに固まってしまった体をどうにか動かして、促されるままに正面するように椅子に座った。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

ソーサーごと手渡されたティーカップを受け取ると、中に注がれた紅茶の香りが漂った。

心做しか、緊張が解けたように感じる。

「……ふふ、写真で見るとよりも……」

「え？」

「なんでもないですわよ。とても、可愛らしい方だな、と思ひまして」「え、あ、いや。オレなんかより、トウコさんの方が可愛いし、綺麗ですよー」

「ふふふ、ありがとうございます。でも、お胸はイブキさんのですわね。羨ましいですわ」

「……胸なんて、邪魔なだけ、ですよ」

「あ、あら。申し訳ございませんわ。配慮が足りなかったようですわね」

あまり、胸とか尻とかの女性の特徴に関する話はされたくない。

そんな俺の雰囲気を感じてくれたらしいトウコさんは、一言謝るとティーカップに口を付ける。

……気を使わせてしまった。あー、もう。まじで、情けなさ過ぎる。男らしくシャキツとしなければ。

「でも、貴女のお名前はわたくしが中学生の頃から度々お目にかかっ

ていましたわ」

「ああ、模試、ですか？」

「ええ」

確かに、中学時代、俺は常に模試で全国一位、二位を取り続けた。その度に、新聞なんかでも取り上げられたことがある。名前を知っていても不思議ではない。

あれ？ そう言えば、燦全院さんの名前もどこかで……。

「もしかして、燦全院さんも模試の上位ランキングにいましたか？ 確か、見かけた気がするんですけど……」

「ええ。終ぞ、貴女に勝つことは出来ませんでしたけど」

「は、はは……」

なるほど。つまり、燦全院さんも俺並みに頭が良い、ということ。やっぱりお嬢様つて、頭が良いのもデフォルトみたいなものなんだろう。二周目の、言わばズルをしているような俺と違って、純粋に頭が良い。ちよつと複雑。

「でも、頭が良い、というのは素晴らしいことだと思いますわ。下級生の貴女に勝てなかったのは、少しばかり悔しいですけども、ね」
「……ありがとうございます」

「いえいえ。ここでは、先輩と後輩。私の方が年季は上ですので、分からないことがあったら、なんでも聞いてくださいまし。先輩として、どんな事でも答えて差し上げますわ」

なんか、気張ってるのがしようもなく思えてきた。こんなに良い人なんだ。緊張するなんて馬鹿らしい。

そう考えると、もう、先までの緊張は完全に無くなっていった。

そして、俺とトウゴさんはティーカップを手に、主に俺がぎこちないながらも会話に花を咲かせて夕暮れまで時間を潰すのであった。

「それで、アキさんがですね」

「……んん？ ……なんだか、眠気、が……」

「ああ、長旅のご様子でしたものね。それなら、あちらのベッドがイブキさんのベッドですのでお休みくださいな。長話に付き合わせてしまつて申し訳ございません」

「い、いえ。お気になさらず。それじゃあ、オレ、ちよつとだけ寝させてもらいます」

ポカポカと体の芯から温まる感覚が眠気を誘い、ここでは倒れるまゝいと眠気に抗いながら、フラフラとした足取りで自分の方のベッドに向かう。

そして辿り着くやいなや、俺は気絶するようにベッドに倒れた。ここでなら、やっていけそうだ。そんな安心感が、どこか、俺の中にあつた。

だからだろうか。ニンマリと、お嬢様らしくない深い笑みを見せるトウコさんを、俺は認識出来ていなかった。

4

あれから、三週間が経つた。

順調にトウコさんや、マナちゃんと仲を深め、先週には入学式を終えて本格的に高校生生活がスタートした感じだ。生徒会長としてのトウコさんの演説も凄かった。普通の高校の校長よりかはカリスマ的だった校長も、トウコさんの演説の前では霞んでしまっていた。やっぱり、トウコさんは凄い。

高校生生活としては、最初、二、三日は周りがお嬢様ばかりであつたのもあつてクラスの中でも浮いてしまつていた感じがあつた。が、みんな気さくで良い人ばかりだったのですぐにクラスで馴染むことが出来たと思う。

友達も何人か出来た。

そして、今日も今日とて自室でトウコさんと夜のお茶会をする。こ最近、ずっと夜が待ち遠しい。

お茶会後は眠気が襲ってきて、パジャマなのもあってそのまま寝てしまうのだ。

ちなみに、少しだけ歯への着色とかも気になりはしたのだが、なんでも良い紅茶はあまり色素が歯につかないらしくそのまま寝ても良いのだとか。

ただ、ここのところ、何だか体の調子が変わなのだ。ずっとうずうずするとか、お腹の下辺りが変な感じがする。

とはいえ、日常生活には支障がないし、もしも悪化するようなら病院にでも行こう。今は無視で構わないだろう。

ともかく、俺は今日もタンクトップにショートパンツというラフな姿で、トウコさんはお嬢様っぽい雰囲気の良いパジャマでお茶会を楽しんでいた。

ティーカップに口を付けて紅茶を楽しんでいたトウコさんが、はたと、何かを思い出したかのように口を開く。

「そう言えば、気になっていたのですけれども、イブキさんは処女なのですか？」

「うぐつ!?! けほつ、けほつ」

いきなりの爆弾発言に、紅茶が変なところに入って咳き込んでしまう。

ここ三週間でわかったことだが、トウコさんは少しだけ天然が入っている。流石に、常識が分からないとか、日常生活が心配になるとか、そういうわけではないのだが、時折こうした爆弾発言をかましてくるのだ。

「え、ええまあ、一応……」

「そうなのですね。てつきり、いつもそのような殿方を誘っているような格好をしていらっしやるので、それなりに遊んでいらしても不思議

議ではないなと思っていましたのですけれども」

「ふっ!? ほっ、げほっ」

また口に含んでいた紅茶を咳き込んでしまった。

なんてことを言うんだ。俺が、男を誘っている格好? そんなわけない。

確かに薄着過ぎて、父さんからは目を逸らされ、母さんからはお小言を頂戴したが、この十六年間、俺の傍には一度たりともそういう意味での男の影は無かった。男友達はそれなりに居たが。

口元をティッシュで拭いながら、抗議の視線をトウコさんに向ける。

「ふふ。冗談ですよ」

「……もう」

「……でも、殿方なら絶対に貴女を放つてはおかないでしょうね」

なんとなく、空気が変わったような……?

呑気にそんなことを考えていると、徐にトウコさんが立ち上がる。

そして、普段とはどこか違った深い微笑みをたたえたままに、俺との距離を詰めてくる。

何故か、怖気が走って、椅子から立ち上がった俺はトウコさんから後退る。本能的な、そんな反応だった。

妖しい雰囲気は吞まれつつあった俺は、ふと、自分の後ろにトウコさんのベッドがあつてこれ以上は退れないことに気がつく。

「——それは、わたくしもですよ♡」

「へ?」

トンっ、と簡単に押し倒された。

俺の上には、トウコさんが馬乗りになっている。

あれ？ え？ なに？

「ふふ、ふふふ。お可愛いこと」

「え。ちよ、ちよつと……トウコ、さん……？」

状況が掴めず困惑する俺の頬に手を添え、トウコさんは、ニンマリと口を弧の字に描いて嗤った。

もがいて抜け出そうと思ったが、そこで、俺は自分の身体が自分のものでは無くなつたかのような違和感に気がつく。

「え、あ、あれ……？ うごか、ない……？」

「ふふふ。そうでしょう？」

「な、なに、を……？」

陰の差すトウコさんの顔を見上げる。

そこには、いつもの淑女然としたトウコさんではない、別の誰かがいた。

その、トウコさんの見た目をした、俺の知らない誰かは、深く深く微笑むと人差し指を俺の唇に這わせる。

背筋に走る、ゾクゾクとした奇妙な感覚が、鮮明に感じられた。

「……可愛らしい。ゴリ押してでも貴女を取れて良かったですわ♡」

「んうっ……！ ゴリ、押す？ 取る……？」

「ええ。ここ、聖エスペランサ女学院では、名家の生まれの息女が特待生の子達を引き取ることができますの」

「……え」

唇から首筋へ。首筋から鎖骨へ。鎖骨から、俺の胸に提げられた豊かな双丘へと、指を這わせていく。

俺も馬鹿じゃない。ここまで来れば、俺が今どのような状況なのか、薄々と分かってくる。

きつと、トウコさんは“レズ”なのだ。俺も男の人格だから男嫌いだし、実質レズみたいなもの。ちよつとだけ、ほんの少しだけ、先程までの恐怖心が治まって気分が舞い上がる。

「……トウコ、さんは……そう、いう趣味、なんですか……？」

「……？ ああ、女の子が好きかどうか、つてことですか？」

「……」

「そうですねえ。これを見たら、はっきりすると思いますよ？」

そう言つて、トウコさんはロングスカートを外す。

憧れの人の生脱衣に、俺の心の中のちんぽは勃起寸前だった。

「まず一つ。勘違いを正しておきましょうか」

「勘違い？」

「わたくしは、貴女が思っているようなレズではありません」

「……？」

え、じゃあ、なんで？ なんで俺は襲われているんだ？ そう言えばさつき引き取ったとか、なんとか言っていた気がする。

困惑する俺を他所に、トウコさんはセーターとワイシャツを脱ぎ、ブラを外す。

ぷるん♡と綺麗な形をした美乳が姿を現し、俺の心の中のちんぽは射精寸前にまで昂っていた。

「わたくしは、女でなければ、貴女のような牝でもない」

「女じゃ、ない？ てか、え？ 俺が、牝？」

「ええ。そして、この場においてのわたくしは——」

牝呼ばわりされて怒らない男なんていない。

ここは男として、抗議しなければ。むしろ、俺の方が雄だ、と。

しかし、それより先に今まさに下ろされようとしている最後の一枚

を、その先の絶景を見なくては。

火照った頭で優先順位を決めて、トウコさんのアソコを凝視する。ゆっくりとずり下ろされていくパンツ。高まっていく俺の興奮。前世も今世も含めて、これ程までに綺麗な人のアソコが見れるチャンスは、多分今しかない。絶対に焼き付けなければ。

そして、俺の興奮は一気に驚愕と恐怖に変換された。

「——貴女を犯す、雄、なのですから」

「……へ？」

ぼろん♡と、そこにあるはずのないものが存在を主張する。

平らで淫らな平地があるだけのはずのそこには、いきり立ったおちんぽが存在していた。

え？ あ、え？　なんで、ちんぽが？

「うふふ。呆然としてしまうのも仕方ありません。貴女のようなおぼこは、私事ですがこんなにも立派で格好の良いおペニスは愚か、そもそも殿方の普通のおペニスすらも見たことがないでしょうから」
「……??？」

未だ困惑から抜けられない。

どれだけ頭を回そうとしても、段々とモヤすらかかってきたように感じられる脳では大して期待もできそうにはない。もしかしたら、浅くなつていく呼吸で酸素が回っていないのかもしれない。

怖い。怖い。怖い。

あんなものがトウコさんについていることも、劣情がソレを勃起させていることも、そしてその劣情の矛先が俺であるということも。

全て、恐ろしかった。

それでも身体は全く動かないし、この状況を打開できるような何か浮かぶこともない。思考はさらに覚束なくなる。身体中が熱く

なっていく。

「あら、媚薬も効いてきたようですね♡」

「び、媚薬……？」

「ええ。今までわたくしが慣らしのために使ってきた物よりも、少々強いのですが……初めては意識がトぶくらい気持ち良い方がいいでしょう。それに、ここまで三週間の間、じっくりと調教した貴女の身体ならこのおペニスを受け入れることも可能だと思いますわ」

媚薬。花のお嬢様、という印象には似ても似つかない異物。

そして、サラリと言われたが、この三週間、俺はそんなことをされていたのか。

目の前の存在に対する憧れや恋慕が、ここに到り、理不尽に対する苛立ちや疑念へと変換される。

ふつふつと、トウコへの怒りが増していく。

だが、怒りが増しても、どうにかできるわけでもない。

どうすれば。どうすれば、今の状態を脱してコイツの魔の手から逃れられる？

「うふ、うふふふ。無理ですよ♡ わたくしから逃げれば、今日一日、この学院に潜む麗しきケダモノ達が、か弱く愛らしく何よりスケベな貴女を貪ろうと待ち構えていることでしょうから♡」

「……そんな……」

嘘だとは思えなかった。

様々な情報が、上手く回らない俺の頭にもそれを自明の事実であると認識させている。

今は。今は、従っておくしか、ない。

犯すのならばともかく、犯されるのは嫌なんだ。それが、男のソレを持つ相手に女として一方的に犯されるなんて、そんなの受け入れられるわけないだろ。

でも、これは仕方が無いことなんだ。それに、入れさせなければ良い。入れさせなければ……。

「……好きにしろ」

「それでは、早速♡」

そう言つて、トウコは俺のタンクトップを脱がす。綺麗な肌と、俺が男だったら絶対に放つておかない100センチメートル超えの爆乳が、外気に晒される。ブラは面倒だからつけていないが、今ばかりはそれを恨んだ。

「これは、また……とても美しい♡ これほどまでに美しさとイヤらしさを兼ね備えた造形美。幾億の調度品にも優る、最高の女体ですわ♡」

「……解説、するなあ……!」

「あらあら。お恥ずかしいので? こんなにも可愛らしい方に、このようなドスケベな身体が備わっているだなんて、愛らしいことこの上ないですわ♡」

浅い呼吸で、上に向けてぶるんぶるん♡と揺れる爆乳を、触れるか触れないかの距離で凝視して解説するトウコ。あまりにも真剣だから、恥ずかしさが上乘せされている。

顔を上気させて、いやいやと首を振る俺の両の手首を掴むと、トウコはずいっと顔を近づけてくる。……って、あ。

「んむっ♡」

「んんっ!?!」

「……うふふ。ファーストキスでしたら嬉しいですわ♡ わたくしはもう数え切れぬほどのオンナをメスに墮としてきましたが♡」

「……っ! オレを、一緒にするな!」

「きやつ……!」

何とか動いた足が、怒りのままにトウゴを軽く尻もちをつかせる程度だが蹴り飛ばした。

しかし、今のでさらに身体のダルさが増してしまった。

次は、どうやって回避する？ いや、どうすれば回避出来る？

トウゴはゆらりと立ち上がると、ゆっくりと俺のほうへと近づいてきた。その顔は、笑っていない。

「……おいたするメスは、お仕置して寝て、調教しなければいけませんわね……!」

「ひっ……!?!」

あまりにも強大な怒気に、情けないことに小さく悲鳴を漏らしてしまふ。

いや、だって、本当に怖いんだって。いつも、優しげに柔らかく笑っている姿しか知らないから……。

いつの間にか俺の足元に立っていたトウゴが、ハーフパンツとその下の下着の縁に指を掛けると、一気にずり下ろしてしまう。

媚薬のせいで、パンツからはねとおっ♡とした糸が引き、もうドロドロになってしまったおまんこが、トウゴの目の前に晒される。

「え、ちよつ、ちよつと……!」

「あら。糸まで引いて、もうびしょ濡れ……暴れられないように、見えやすいように、より無様に可愛らしく、こうしてさしあげますわ」

「や、やめ……これ、恥ずかし、い……から……!」

どこから取り出したのか、縄で俺の手足をベッドの片側、その両端の突起に結び付けてしまう。

俗に言うマンガリ返しのような体勢となってしまう、隠すことも、身動きすら出来ずにおまんこやアナルまで、トウゴに見せつけるように晒してしまう。

うわ、これ、恥ずかし過ぎる。
ただでさえ赤い顔が、茹でダコのように真っ赤に染まった。

「ふうっ♡」

「ひああああ!?!♡」

ゾクゾクっ♡とした感覚が背筋を通って脳髓に響く。吹きかけられたトウコの息が、俺のおまんこに刺激を与えたのだ。

息だけで、普段なら絶対に出さないような声を上げてしまった。その事実が、どれくらい今の俺の身体がやばい事になっているのか如実に教えてくる。

「ぱくぱくっ♡ って開閉して、時折とろおっ♡と愛液を垂らす。

……ふふ♡ 思った通り、ド変態ですわね♡」

「〜っ!?!♡ そ、そんなこと、ない!」

ド変態。そう詰られた時、身体にゾクッ♡とした感覚が走った。

俺は、それを認めたくない一心で言葉を紡ぐ。

「お、お前なんかに墮とされる程、オレはやわじゃない!」

「……♡ ふふ、ふふふふ……♡ イブキさん、貴女、どこまでも分かっていらっしやるのね♡ それなら、わたくしも全力で墮として、犯し尽くして差し上げなくては♡」

トウコは、妖しく微笑んだ。

そして、ほっそりと長い指先で俺のおまんこをくちゆくちゅ♡と軽く弄ると、一気に二本の指を突き入れる。

「あ♡ あ♡ ああああ!?!♡」

「……熱いですわね♡ ですが、きゅっ♡きゅっ♡ と締め付けてきて、今からおペニスが期待でどぴゅどぴゅっ♡ とお射精してしま

「そうですわ♡」

「ふうう……♡ んうっ♡ ううっ♡」

口を噤んで、喘ぎ声が漏れ出ないようにする。

自分じゃないような、それでもそれなりに慣れ親しんだ自分の声が、こんなにも甘ったるく変容しているのを聞かされると、頭がおかしくなりそうだった。

「……ふふ♡ 我慢するのは身体に良くないですわよ♡ 今から、しっかりと鳴かせてあげますわ♡」

「余計、なっ♡ お世話、だ!♡」

「その乱暴なお口も、今にメス啼きしか出来ないようになりましてよ♡」

ちゅこちゅこ♡ぬちぬち♡と、まるで楽器を奏でるように、はたまた玩具で遊ぶように、一方的に俺のおまんこを指で弄くり回す。

その度に、甘い刺激が俺を侵し、腰がピクっピクっ♡と跳ねてしまおうが、しっかりと固定されてしまっているから、本当に腰しか動かせない。

「ここが貴女の弱点♡」

「んぎっ!♡ そ、それやめ……!♡」

「それで、こっちも貴女の弱点♡」

「おへっ!♡ にや、にやんでそんな……!♡」

「可愛い……とても、とても可愛らしいですわ♡ ほら、ほら♡」

「あっ♡ んにいつ!♡ ひいつ♡ や、やめっ♡ やめ、ろ♡ それ

♡ やめてえっ!♡ んにやああっ!♡♡♡」

次々と引っ搔かれたり、ぐいっと押し込まれたりして、その度にぴゅぴゅっ♡と軽く潮を噴いてしまう。

身動きも取れず指先ひとつで簡単にイカされる。その事実が、俺の

男としてのプライドをガリガリと傷付けていく。
それと引き換えに、言い知れない切なさを齎しながら。

「貴女のおまんこは、この三週間で完璧に知り尽くしましたから♡」
「……………」

「もう、何処を触れば可愛らしい姿を見せてくれるのか、全部わかっていてよ♡」

それじゃあ、万に一つも勝ち目が無い……。こっちは媚薬に拘束に開発、そして、弱点という弱点が全部バレている。

何より、怖くてオナニーすら出来なかつた経験皆無な俺と、経験の豊富そうな彼女とでは勝負にすらならないだろう。

……………このまま、犯される……………♡　そ、そんなの嫌だ。

……………何としても、耐えなくては。耐えれば、ここから逃げ出せる。取り敢えず、マナちゃんの所にでも避難させてもらおう。

「他の女のことを考えていますね？」

「……………え」

「そんな余裕があるなら……………もつとキツくしても構わない、ということですよ。よろしいのかしら？」

「そ、それは……………ま、待ってくつ……………!?!?♡」

はつと気がついた時にはもう遅かった。

目からハイライトが失せたトウゴが、俺のクリトリスに親指を当て、おまんこの中に三本の指が突き立てる。

それだけで、俺はいとも容易く絶頂から降りられなくなってしまった。

「……………ああああああああああ!?!?!?♡♡」

「……………♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

女まで奪われる♡

これまでの十六年間、揺らぐことなくあり続けた男としての感性が、人格が揺らぎを見せていることに気が付く。

ダメ、だ♡ 絶対に♡ 俺は、男なんだ♡

「んあっ♡」

「抵抗のつもりですか？ 自分の抵抗でいくなんて、相当に仕上がってるみたいですね♡」

きゆうっ♡と今にも受け入れようとしていたおまんこの入り口を、気合いで引き締めて閉ざす。

開発されてしまっていた俺のおまんこは、それだけの動きで白く濁った愛液を吹き出してしまおう。

それが、俺の身体がもう後戻り出来ないところまで来させられているということに自覚させようとしてきているみたいだった。

俺の知らないところで開発されて、俺の知らないところで雄への媚び方を覚えてしまった雄失格の優秀な牝まんこ。

それでも、この些細な抵抗で少しくらいは……。淡い期待でおちんぽを見つめる。

しかし、それは簡単に碎かれてしまうのであった。

「良いですわ♡ それなら……せー」
「……………」

破城槌のように引き絞られた腰。

尖端とおまんことの間に、先走りと愛液によって出来た最低な橋がかかる。あまりにも淫靡で、俺の目は釘付けになってしまった。そして。

「——のっ!!」
「おっ……?」

俺は、ガクガクと壊れてしまったかのように腰を上下させながら、潮を撒き散らして盛大に絶頂した♡

待って♡ だめ♡ オレのおまんこ、抵抗しなさすぎい♡

「ふふふ♡ オレっ娘爆乳ドスケベ生意気娘の処女、ゲットですわね♡」

「ああ♡ あはあ♡」

「嬉しくて何も話せませんか?♡ うふふ♡ それなら動きますわよ♡」

あまりの衝撃に口をパクパクとさせていると、唐突に俺の両手に自らの両手の指を絡める、所謂“恋人繋ぎ”をしながら、正常位の姿勢でピストンを開始する。

「あっ♡ ひおっ♡ んいつ♡ あっ♡ ああっ♡」

「甘い声が漏れてますわよ♡ ほらっ♡ もっと鳴きなさい♡」

「それ♡ やめっ♡ ぜんぶで♡ しょっっ♡ えぐりやないでえっ♡」

ぱちゅんっ♡ ずりゅんっ♡ どちゅんっ♡ と水音を立てて、結合部から、擦れ合う中から、突かれる最奥から快感が全身を駆け巡る。

イクことしか出来ない俺は、無様に潮を撒き散らかすほかなかつた。

「どれだけイキ潮吹けば気が済むんですの?♡ 溺れてしまいますわ♡」

「んおっ♡ んなことおっ♡ イっ♡ いったってえっ♡ む

りいいいいっ♡ イクッ♡ イクうっ！♡ あむっ!?!♡
「ちゅっ♡ ちゅるっ♡ ぢゅぱっ♡」
「んあっ♡ ぷちゅっ♡ んむうっ♡」

トウコは、俺の唇を自らの唇で塞ぐと、さらにピストンを早める。
正常位で♡ 恋人繋ぎで♡ キスハメなんて♡ これ、もう完全に
恋人だよおっ♡

ピンクに染まりきっていた俺の脳内が、そんなことを考え始める。
もう、何もかも、おかしくなっていた。

「ぶはっ♡」

「んあっ♡」

「やっぱり、貴女を選んで良かったですわ♡ 何としてでも、わたくしの物にして差し上げますから、覚悟しておきなさいな♡」

ピストンの動きがさらに早くなる。もう、終わりが近いのだろう。
このままでは、レイプされた拳句に中出しされてしまう。オナになるなんて、孕むなんて嫌なんだ。嫌なはずなのに。
なんで……なんで……♡

「これ♡ レイプ♡ レイプなのがいい♡ なんでえっ!?!♡」

「ふふ♡ わたくし達の身体の相性が最高、ということにほかなりませんわ♡」

「だめっ♡ ふぎけ、るなあっ♡ オレのからだのばかっ♡ なんでよろこぶんだよおっ♡」

レイプのはずなのに。そのはずなのに、俺の子宮がちゅうちゅ♡と亀頭に吸い付いて精子を強請っているのが分かる。両足を組んでガツチリとトウコの腰をホールドしてしまっていた。

全部無意識だ。

俺の心はそれを拒んでも、メスとして完成しつつある身体は、執拗

な開発の手腕と雄々しいおちんぽを持つトウコに全力で媚びている。
そして、絞り出すような動きをしてしまっているはしたないおまんこに、限界が来たのか、苦悶の表情と悦楽の表情を緬い交ぜにしたトウコがピストンを最大まで早める。

それだけで、俺はまたイキ地獄から戻ってこれなくなってしまった
♡

「ふふ、ふふふふふ ♡ あははっ！ ♡ 貴女、最高ですわ！ ♡ 飛び切り濃い、イキますわよ！ ♡」

「っ! ♡ ……いやっ ♡ いやだっ ♡ だすなっ ♡ お、おねがいですっ ♡ ださないでえっ ♡」

恥も外聞も捨てて、俺は懇願する。

孕ませられたら、俺は本当に女になってしまう。それだけは拙い。しかし、俺の恥辱の懇願はバツサリと切り捨てられてしまう。

「出すに決まっていますでしょう ♡ 貴女を孕ませて、一生わたくしの手元に置いておくつもりなのですから ♡」

「ひっ! ♡ そ、そんなのいやっ ♡ らめっ ♡ オレ、オレはおとこだからやあっ! ♡」

言ってしまった。

自らが男であることを暴露してしまった。しかし、これで多少は萎えてくれる……か？

「あはっ ♡ あははははは! ♡ 貴女、本当に最高ですわね ♡ そんなドスケベでド変態で最高に絞まりの良い名便器まんこを持った自称雄なら、同じ雄のピストンでもへばったり、イったり……ましてや、孕んだりはしないですわよねえ? ♡」

「へ? ♡ あ ♡ うそっ ♡ それ ♡ だめっ ♡ まっ ♡ まっ ♡ まっ ♡」

「孕みなさい♡ 孕んだら、許してあげるわ♡」

トウコは、始まりみたいにおまんこからおちんぽをずると引き抜き、限界まで腰を引き絞る。

そして、俺の柔らかな大きい尻を鷲掴みにすると、綺麗な微笑みを浮かべた。

あ♡ だめだ♡ これ♡ 死ぬ♡ 男としての俺が、死んじゃう♡
俺は、いやいやと弱々しく首を振って懇願するが、それが聞き入れられることは無い。

「——イクっ!!」

「——んほおおおおっ!?!♡ あついの♡ でてりゆううううっ!?!♡♡♡」

!?!?
♡

快感が強すぎて、脳が焼ききれる。白目を向いてアへ顔を晒し、鼻からはぷつと血が吹き出た。それと同時に潮と尿も。

「あっ♡ あへっ♡ おほっ♡」

「やつぱり、貴女には凛々しきさよりも、その無様可愛い姿がお似合いですわよ♡」

一息に突き入れられたおちんぽが、俺の最奥で爆発したのだ。

吐き出された精子が、元気に俺の子宮内を泳ぎ回っているのが分かる。分かってしまう。

「はあっ♡ はあっ♡ 気持ち良かったですわ♡ って……生きてますのー? おーい」

「あ♡ あへっ♡ おひっ♡」

潰れたカエルのような姿勢で、未だにちよろちよろ♡と小便を撒き

散らして、無様にイキ続けるオレの頭を、トウコは愛おしそうに撫でる。

俺も無意識ながらに、猫のように頭を委ねてしまった。

……もう、戻れる気がしない。でも、オレは男だ。こんな無様にアへ顔晒してても、オレは男、だから。

「……………ぜ、ぜつたいにゆるさねえ♡」

「あら？ そんなこと言って良いのかしら？」

「……………へ？」

さあつと血の気が引いていくのが分かる。媚薬で火照っていた身体が嘘みたいだ。

トウコが見せてきたスマートフォンには、オレの顔。それも、あれもないアへ顔。スクロールすると、そこには様々なオレの痴態が鮮明に保存されていた。

「こうして弱みを握っておけば、貴女はわたくしには逆らえない♡」
「この、げすがあつ♡」

「ふふ♡ それでは、また明日もよろしくお願いしますわね？ イブキ♡」

「……………♡」

もう、逃げられない。これから先、二年間、オレはずっとトウコの性処理便器として扱われるんだ……………。

……………♡

また頭を撫でられながら名前で呼ばれた時、どうしようもなく下腹部が疼いてしまった。

オレに反応してか、ぴくんっ♡とトウコのおちんぼが跳ねる。

……………アレが、さつきまでオレのおまんこに……………♡

恐ろしくなつて目を逸らしながらも、オレは、未だに隆起するそのおちんぽをちらりと見遣り、未だに温かさと快感の残る下腹部を摩るのであった。

後編

1

レイプされたあの日から、今日で一ヶ月になる。

そろそろ本格的に暑くなってくる頃だ。学院でも、半袖にカーディガンやセーター姿の生徒が増えてきた、ように思う。

かく言う俺も半袖だ。廊下ですれ違う先輩や、今も学院の屋上で昼飯を食べながら話しているマナちゃんからは、大胆だつてびつくりされたけど。スカートくらいなら履けるようになったが、それでも季節の服装は男の時のようにラフなままが多いように思う。

「それでですね？ ユイ先輩が、私の書いた小説を褒めてくれたんですよ！」

「へえ。良かったね」

「はいー」

マナちゃんは、なんでも小説家志望らしい。結構打ち解けてきたのか、先日教えてくれたのだ。

同室のユイ先輩とやらも良い人そうで、オレとしては羨ましい限りだ。

……本当に、なんであんなやつと同じ部屋になっちゃったんだろうか。あれを反省して、写真や動画も消してくれるなら、まだ許し……はしないけどそこまで恨みもしなかった。

なのに、トウコは懲りるところかオレを見つけると事ある事に『貴女みたいな牝フェロモン垂れ流しのドスケベ女がいるからおペニスに怒り心頭ですわ。トイレで一発又かせなさい』とか『もう。どれだけわたくしをムラつかせるつもりですか？ お仕置して差し上げますから、今ここで全裸になりなさい』とか言つて、ハメ撮り写真を盾にされたらオレに拒否権はない、から……。

思い出すだけで、媚薬も何も無いのに身体が熱く火照るようにまですなつてしまった。これは不味い。早急にどうにかしないと。

そう思いながら、購買で買った美味しいパンを頬張っていると、マナちゃんが何やらモジモジしながらオレを見つめているのに気が付いた。

「……あの、イブキさん。先輩とは上手くいつて……ますか？」

「……んー。まあ、それなりだと思うよ。マナちゃんは？」

「えっと……うん。私もそれなり、です。多分。良くしてもらってるから……」

はあ。本当に羨ましい限り。トウコもオレにいろいろと良くしてはくれているのかもしれないけど、レイプの件やその後のアレソレのせいでマイナスに振り切れている。

すると、意を決したかのような佇まいでマナちゃんが口を開いた。

「ただ、時々変なことをしてきて……」

「……変なこと？」

変なこと、変なことかあ。

……心当たりがあり過ぎる。変なことしかされてない。

彼女も特待生だから、そのユイ先輩とやらもトウコみたいな、まあ、その、そういう奴なんだろう。でも、マナちゃんの様子を見る限り、そこまで酷い人ではなさそう良かった。

でも、目の前の少女が、オレの友人がオレと似たような憂き目にあっていると考えると、少しだけ複雑でもある。

「この学院の人って、やっぱり、女の子同士でのそういうことが好きなのかな？ つて……」

「……っ♡ ……あー、そうなのか……。いや、オレはよく分かんない。確かにスキンシップは多いかも知れないけど」

「そ、そうですね！ ごめんなさい、変なこと言っちゃって……」

マナちゃんの言葉から思い出してしまった陵辱の記憶。

それを認めたくないオレは、否定の言葉を紡ぐ。

少しだけ気まずい空気が流れてしまう。何か話題はないかと頭を巡らせていると、ぽんぽんと肩が叩かれた。

それだけで、身体が思い出してしまつて……いや、びっくりしてしまつて悲鳴が上がる。

「ひっ……っ♡」

「ふふ♡ イブキ♡」

「……なんだよ、トウコ……さん」

振り返れば、そこに居たのは例のアイツ。流石に誰かがいる所で生徒会長であるコイツを呼び捨てには出来ない。

オレの最大の敵意の対象である女、トウコは、口元にいつもの頬笑みを浮かべてそこに立っていた。

俺の向かいにいるマナちゃんの姿を認めると、洗練された所作で優雅にお辞儀をする。

「マナさん、ですわね？ わたくしはイブキのルームメイトの」

「燦全院生徒会長ですよね!! 私はいづ川真奈です！ 会えて嬉しいですよー！」

「ええ、如何にも。わたくしこそ、会えて嬉しいですわ、マナさん」

感無量と言った感じでペコペコと頭を下げるマナちゃんのことを見るトウコの眼差しは柔らかく温かかった。

そう言えば、マナちゃんはトウコのファンなのだとか。そんなに素晴らしい存在ではなく、どうしようもなくドSでド変態のクソ野郎なのだが、そんなことをマナちゃんに言えるわけもない。やっぱり、複雑な気持ちだ。

このまま去ってくれば良いのに。そう思っても、トウコが何もせずには帰るはずもなく。

「……………」

「え、あ…………それは…………」

「…………おい、トウコさん……………」

「…………ふふ♡」

何やらトウコがマナちゃんに耳打ちすると、彼女は顔を赤くして俯いてしまった。

ただ事ではない。文句を言おうとトウコに詰め寄ると、彼女はあろう事かオレの無駄にデカイ尻肉を鷲掴みする。

「んあつ♡…………っ!」

「あらあら♡ ちよつとからかい過ぎたみたいですね♡」

嬌声を上げてしまったオレは、恥ずかしさと怒りで、トウコの手を払い落とす。

まだマナちゃんは立ち直っていないようだ。今の声が聞かれていないことを願うばかり。

トウコはオレの肩に手を回すと、耳元に口を近付けてきた。

「イブキ…………後で、キツイお仕置ですわよ♡ 覚悟しておきなさいな♡」

「…………っ♡」

「マナさん、わたくしはイブキさんに少しばかり用がありますのでここで失礼致しますわ。行きますわよ、イブキ」

恥ずかしさと恐怖心で体が強ばったオレは、トウコに促されるまま、屋上を後にする。この後に何をされるのか、それは勿論気になることだが、それ以上にマナちゃんのこと気が掛かりであったオレは最後にマナちゃんの方をちらりと一瞥する。

彼女は、やはり何かに耐えるように俯いていた。

「あうっ♡ んひいっ♡」

ぱちゅんぱちゅん♡と水音と肉を叩く音が、トイレの個室に響く。
また、微かに漏れ出たような喘ぎが、性臭漂う其処に伝播して、淫靡な雰囲気を助長させた。

「あっ♡ ぐうっ♡ んうっ♡」

「このっ♡ わたくしの手を叩き落とすなんて！♡ 許せませんわ！♡」

「あひっ♡ んあっ♡」

いつもの5割増しくらいに苛烈なトウコのピストンが、出来上がったオレのおまんこを蹂躪する。

両手をトイレの蓋について、片足がトウコの肩に持ち上げられた状態でのセックスは、気持ち良さよりも恥ずかしさの方が少しだけ強く、オレの反抗の気を確実に削いでいた。

「他所のメスと仲良くランチをしている暇があるならば、わたくしのおペニスを如何に気持ち良く出来るか考えてなさいな！」

「おっ♡ んあっ♡ あっ♡ や♡ そこ♡ やあっ♡」

「っ♡ そんな、可愛らしく喘いだって許しませんわよ！」

「ひうっ♡ か、かわいらしくなんてえっ♡ してないいっ♡」

ゴリゴリとおまんこを削るようなピストン。そして、子宮ごと潰すような子宮口への執拗な突き。

取り繕う余裕もないくらい、オレは感じさせられていた。

「もう、すっかりメスですわね♡」

「や♡ ちがつ♡ オレは、おとこっ♡ おとこだからやあつ!♡」
「まだ自分をオスだと勘違いしていらっしやるの? もう♡」
「ああああつ♡ それっ♡ それやめてえっ!♡」

子宮口をグリグリされると、出したくもないのに絞り出すかのような喘ぎ声が出てしまう。それが無性に恥ずかしいのに、何処かその快楽には安心させられてしまう。

ダメだ♡ これダメ♡ これが続くと変になる!♡

その思いで身をよじるが、細い腰を、両の手でがっちりと掴まれると、自分が性処理のための道具に成り下がっているみたいに思えて、屈辱と変な気分に見舞われる。

「ふっ♡ ふっ♡ ほら♡ イブキ♡ イってしまいなさいなっ!
♡」

「らめっ♡ ささやくの♡ らめらってえ!♡」
「んぐっ♡ この♡ 急におまんこ締めるんじゃないですわよ!♡
もっとしなさいなっ!♡」

「あうっ♡ そ♡ そんなの♡ むりっ♡ じぶんじゃ♡ こんとー
るできにやいからああああっ♡」
「っ♡ 出来てますわよっ!♡ 好い娘っ♡ とっても好い娘っ!
♡」

おまんこを激しく突かれながら、今みたいに耳元で優しく囁かれると、無意識におまんこが締まってしまふのだ。

ここがトイレであることも忘れて、オレは猫なで声のように媚びた声を出しながら、ぷしゃっ♡と潮吹き絶頂をキメてしまう。

「イクっ♡ イブキ♡ イきますわよっ!♡ 子宮で受け止めなさい
!!♡」

「だめっ♡ なかだし♡ やだっ♡ もうへんになりたくないっ!
♡」

「だあめですわよ♡　しっかりと中出しされて、女の喜びを知りなさい♡」

「うっ♡　イクツ♡　また♡　またイグツ!♡」

ラストスパートに入った腰使いが、無遠慮にオレのおまんこを突き上げて、オレは為す術もなく連続絶頂する。

「ふふ♡　登って来ましたわ♡　いぐっ♡　おまんこにザーメン出るっ♡　イクイクイクツ!!♡　射精るツ!!!♡♡」

そして、オレの中を埋め尽くす熱く硬いおちんぽが膨らんだかに思うと、次の瞬間、圧倒的な量のザーメンを吐き出した。

「んああああっ!!♡　これだめっ♡　はらむっ♡　あかちゃんできるうっ!!♡」

ビチビチと活きの良さをこれでもかと知らせるように、精子の群が子宮口に殺到し、こじ開けてオレの子宮に襲いかかった。

あ♡　だめっ♡　女の子みたいにイっちゃう♡　オレ、男なのに♡　中出しキメられて、メスイキしちゃう♡

精子一匹につき一回はイっているんじゃないかと思う程の連続した絶頂に、口をだらしなく開いて舌を突き出しながら、白目を向いてしまう。

「うっふ♡　いきまくりおまんこに下品なアへ顔♡　また滾って来てしまいましたわ♡　責任取ってもう一発又かせなさいな♡」

「あ……♡　うあ……♡」

放心するオレを他所に、どろりとザーメンを垂れ流すオレのおまんこに、再度おちんぽがあてがわれる。

止める間もなく、未だに硬さと熱を持ったおちんぽが挿入されたと

ところで、オレの意識は途切れた。

3

ガニ股状態でおまんこをほじくり、便器の中に出された精液を排泄する。もしも妊娠なんてしてしまったら、オレは絶対に狂う。それに、それはイコール女であることを認めたと言われても言い訳出来ない。

「ん♡ ……くっそ……」

媚薬も何も使っていないのに、オレの身体はもう既に何も準備せずとも、雄を受け入れられるようになってしまっていた。

それが、今は何よりも辛い。

自分が男であると自負するなら、別の男の中に受け入れるなんてありえない。処女を失うということは、即ち、オレが自分を女であると認めた時だけだと思っていた。

だが、現実には男とも女とも分からないような存在によって無理矢理にレイプされた形で。

それが、余計にオレの神経を逆撫でする。

男にレイプされたのなら、ソイツをぶっ殺せば良い。でも、見た目女なアイツに犯されたことが、どうにもオレの中で変な火種になって燻っているのだ。

「んふっ♡ んんんっ♡」

このままじゃいけない。

思い至ったオレは、必ずトウコとのこの関係を終わらせてみせると誓い、最後の一掻きで潮を吹いて絶頂した。

4

「それで？ わたくしのことが嫌いなのに、おまんこはキュンキュンして潮吹きしちゃうイブキは、わたくしに何の用があるんですの？」
「〜っ！ うるさい！ そういうのは良いからー！」
「ふふ、からかっただけですのよ」

椅子を翻して、高そうな執務机越しにこちらを見るトウコ目は、やっぱり、何処かオレを見下しているような、慈しんでいるような。そんな妙な視線で見られるのはごめんだった。

「……それで？ わたくしに可愛がって欲しいというのでしたら、ここで始めても良くてよ♡ そんな、ムチムチしたメスの身体を見せられたら、わたくしのおペニスも黙ってはいられませんもの♡」
「そんなんじゃない……！ トウコ……話がある」

放課後、トウコ以外の面子がいなくなったのを見計らって、オレは生徒会室へと赴いていた。

理由はもちろん、はつきりと訴えてこの関係を終わらせる為だ。
流石のコイツでも、同じ人間で、それも子供のはず。オレはトウコよりも精神的には二倍年上だ。ここは、年長者としてこういう行為がいけないことであると言わなくてはならない。それに、彼女が同意してくれたら、歪なこの学院もどうにか出来るかもしれない。

「あら、奇遇ですわね。わたくしも、今日の夜のことでお話がありましたよ」
「……………」

もしかしたら。もしかしたら、己の行いを悔いてくれているのかもしれない。オレは淡い期待を抱く。

今なら。そう思ったオレは、トウコを説得するために口を開いた。

「この関係を終わりにしよう」

「……ふふ。ここも奇遇なようですわね」

「……！ 本当につ!？」

執務机に手を着いて身を乗り出すようにして確認を取るオレに、トウコは妖しく笑いながら口を開く。

「ええ。ですが、条件がありますの。流石に、わたくしも立場というものがありませんよ。極上の孕袋をむぎむぎ取り逃がしたとあっては、聖エスペランサ女学院の生徒会長の名折れ以外の何者でもありませんわ」

「……なんだよ、その条件って」

「それは、二つ」

「んっ♡ な、なにすんだよ!」

すると、トウコは徐に目の前で揺れているオレの胸に手を伸ばす。右の胸を鷲掴みにすると、揉みしだきながら口を開いた。

「ふっ♡ んいっ♡ や、やめろって♡ あんっ♡」

「まず一つ目は、この学院が運営する、ふたなり淑女の為の有料動画配信サイトに一度出演してもらうことですわ」

「ゆ、有料動画配信サイトって♡ それって♡ え、AV♡ つじやねえかっ!♡」

「ええ。似たようなものですわね。ですが、このサイトは厳正な審査を通ったふたなりの淑女しか閲覧出来ませんわ。野蛮な殿方に見られる心配はありませんわよ」

「んうっ♡ そ、そんな問題じゃなくてえっ♡」

尚も揉み続けられる胸から登ってくる快楽に、段々と腰が砕けてきてしまう。立っていられなくなったオレは、胸を下敷きにする形で執務机にもたれかかってしまった。

「ふふ♡ 流石は自分のことをオスだと言い張る、マゾ雑魚メスなだけありますわね♡」

「んううっ！♡ ひあっ♡ ち、乳首いつ♡ カリカリしないでえっ♡」

「ここですか？♡」

「んにいつ!?!♡ つ、抓るのもだめえっ♡」

膝がガクガクと笑い、腰が快感に震える。

すると、いつの間にも移動したのか、俺の真後ろに来ていたトウコが両手でオレの胸を揉みしだき始める。

「そして、その動画の中でわたくしの攻めに屈することなく、わたくしの物にはならないという宣言をすれば、名実共に貴女は私の手から離れる、というわけですよ」

「んおっ♡ 乳首っ♡ は、はじくのらめっ♡ おっ♡ んあっ♡」

「……もつとも、この程度の愛撫でアヘりかけている貴女如きでどうにかなるとは思いませんけれども」

自分でも悲しくなるくらい開発されてしまった身体は、もはや、オレの物ではなく、トウコの物であることを認めつつある。

この提案に今乗らなければ、もう次は無いかもしれない。もしも、チャンスがあっても、次の機会ではもう……。

過ぎった最悪の考えを頭を振ることで振り払い、オレはこの話を受けることにした。

男としての矜持がある。オレは、負けない。

「ふふふ♡ それなら、明日はお休みですから、早速今夜から明日の朝まで生配信ですわね♡ 貴女がどこまで耐えられるのか、見物ですわ♡」

「……ぜってえに、耐えてやる。オレは、お前のものなんかじゃねえっ♡」

て、んっ♡ 証明してやる……!」
「楽しみにしておきますわ♡ ……ああ、それと。こちらを着てきて
くださいませ」

オレの言葉により一層笑みを深くしたトウコは、生徒会室を出てい
く直前に、思い出したかのように懐から何かを取り出して、未だに地
面に座って肩で息をするオレへとその何かを投げる。

「……っ!?!」

「オープリンランジェリー、という物ですわ♡ きつとお似合いになる
ことですよ♡」

それは、乳首の部分とおまんこの部分の布だけがきりとられたよう
な、黒の下着。

目も当てられないその様に、オレは握りしめながら、トウコに抵抗
する。

「こ、こんなもの着られるか!?!」

「もしも着て来ていただけないのでしたら、このお話は無しというこ
とで。もちろん、生配信には出演していただきますが♡」

「……分かったよ。着れば良いんだろ、着れば!」

「ええ♡ それでは、わたくしも準備がございしますので、また後程♡」

優雅なお辞儀でその場を去るトウコ。

静かになった生徒会室に残されたのは、恥ずかしい下着を片手に頬
を赤らめるオレだけだった。

5

入浴時間も終わった夜九時過ぎ。

自室の洗面所で、屈辱的なオープリンランジェリーに着替えたオレ

は、両手で胸と股間を隠しながら居間へと足を運ぶ。

「あらあら♡ やっぱりとでもお似合いですわね♡」
「…………うるせえ」

そこには、ニマニマと嫌な笑みを浮かべるトウコと、本格的なセツティングがされた配信道具、そして、いつの間に運び込んだのかキングサイズのベッドが鎮座していた。

これから何をされるのか。想像するだけで顔が赤く染まり、湯だったように火照り始めてしまう。

絶対に、この機会を逃すわけにはいかない。戦場に赴く心構えで、招かれるままにトウコの隣へと腰掛けた。

キングサイズベッドのふかふかとした感じと、程よい反発。そして、さりげなく腰を撫で回すように回されたトウコの手。

…………いまからここで…………♡

「あら？ もう堕ちてしまわれたのかしら？」

「くっ！ そんなわけないだろ！」

「そう。それなら良かったですわ」

すると、トウコはオレを膝の上に乗せて、唐突に下着の布のない部分から露出するおまんこ乳首を弄り出す。

「あつ♡ も、もうするのか？♡ んっ♡」

「ええ。時間ももつたいないですもの♡ さっさと準備を…………ああ、そう言えば、もう配信始まってますわよ？」

「…………え」

「ほら」

促されて、目の前を見ると、そこには一台の本格的なカメラが無機質なレンズにオレの痴態を映し出していた。

羞恥にただでさえ赤い顔が更に赤くなる。

「そのこのディスプレイにコメントが出ますわ。しっかりと確認すること」

「……あ、ああ」

「じゃあ、始めましょうか♡」

再度始まる攻め。

オレは、先程トウコが指したディスプレイに緩やかに流れていくコメントを目で追うことにした。

：トウコの番は生意気系なのね。分からせてあげるのが楽しそう。

：あら？やっと配信されてることに気が付いたみたいだね

：結構頭悪そうだねー

生意気系とか、頭が悪そうとか、失礼な先輩だ。

……つて、なんか、今日♡ 激しい？♡

オレの反感を他所に、トウコの手の動きが加速していき、オレはあつという間に高めさせられる。

グチュグチュ♡と部屋に響き始めた水音。トウコが、オレのおまんこから溢れる愛液を掬い手で弄んで、胸へと運び、塗りたくっていく。

オレの愛液ローションで滑りが良くなったことで、指先が踊り、乳輪をなぞり、乳首を扱かれてしまう。

「そんなことないんですよ？ この娘、実は、わたくしよりも頭が良くて」

「あつ♡ あつあつあつ♡ イクツ♡」

「三年間不動の模試一位様ですものね♡」

「だめっ♡ ほんと♡ もうイクツ♡ イツちやうから♡」

「イツて良いですよ♡ ほら♡ イけ♡ イけ♡」
「ああ♡ イっ♡ イクッ♡ イクウッ!♡」

あまりの快楽に腰が引けてしまうが、おまんこへの容赦ない追撃と耳元での囁きで、あっという間に一回目の潮吹き絶頂をしてしまった。

：へえー意外

：気持ち良さそうなアクメ顔ですね

：おっぱいもお尻でかいね。何センチあるの？

：そうだ、自己紹介してよ

「あっ♡ クリ♡ ひっぱらないでっ♡」

「ほら。アクメに浸ってないで、先輩方に自己紹介しなさいな♡」

「わ、分かった♡ わかったからやめっ♡」

「ほら♡ もう一回イっておきなさい♡」

「イクっ♡ イクっ♡ イくううっ!♡」

二度目の潮吹き。

これ以上イカされたくないオレは、必死に自己紹介の言葉を紡ぐ。

「オ、オレは、あっ♡ 羽島、イっ♡ イブキつていいますっ♡ んっ♡
♡ バストは105cmでっ♡ ひっ♡ ヒップは、91cmですっ♡
♡ あ♡ だめっ♡ また♡ またイっちやううっ!?!♡」
「堪え性の無いメスですわね♡」

：イブキちゃん、どっちもデカイね

：これは、トウコちゃんも良い娘見つけたねえ

：それに感度も抜群ですね

クリトリスを弾かれながら、乳首をすり潰されると、それだけでまた潮を吹いて絶頂する。簡単にイッてしまうように作り替えられた身体では、絶頂を我慢することは不可能だ。

だから、オレは、イクのは我慢しないで心だけは折れないようにする。それが、作戦とも言えない今回のオレの作戦だった。

「潮、とまらないっ!?!」

「もう♡ 軽くおもらしですわね♡ この歳にもなって♡」

：デカ乳デカケツ生意気美少女メス堕とし生配信っていうから来たのに、もうほとんどメス堕ちしてるじゃないですか

：まあ、トウコのテクニクに勝てるメスなんていないからね

：腹立たしいことに、私のメスも寝取りましたからね

「あらあら。その節はごめんなさい、ですわ。お詫びに、今度、わたくしが一番愛してるこの娘を皆さままでマワさせて差し上げますから、それで手を打ってくださいまし」

「あああああ!?!♡ イクッ♡ もういきたくないっ!?!♡」

：そうですね。それなら良いでしょう

：この極上のメス肉が堪能し放題なんて、いまから勃起が収まらないわ

：やっぱり、メスは肉付きが良い方が好きだなあ

「ほら♡ わたくし以外のおペニスも堪能出来る乱行パーティが取り決められてしまいましたよ♡ 良かったですわね♡」
「よ、よくなひいいっ!?!♡ なんで♡ なんで勝手に決めりゅのおおっ!?!♡」

流れていくコメントは、どれもオレを犯したいという意志をありありと見せている。中には、孕ませて結婚したいとか、一生監禁してイカせ続けたいとか、頭がおかしくなりそうな事も書き込まれていた。

：やっぱりドMなんだねー

：ケツ穴が弱そう（小並感）

：多分、露出とかにも向いてるだろうね

「あら良いですわね♡ 今度、貴女のお友達のマナさんの持ち主でもあるユイにケツ穴を掘らせてあげましょう♡」

唐突な聞き覚えのある名前に反応する。

やっぱり、マナちゃんも酷い目に合わされているに違いない。

「っ！ マナちゃんは何されてるんだ!?!」

「ああ、知らないのですわね♡ ユイは、ケツ穴にしか興味が無い困った子で、彼女と同じ部屋に置かれたメスは一生前の穴では満足出来なくなるようにされてしまうんですの♡ わたくしが勝ち取って良かったですわね♡ 最初貴女に目をつけていたようですから♡」

「……っ！ やっぱり、どいつもこいつもおかしい！ なんなんだここは!?!」

トウコの拘束を振り払って、距離を取る。

マナちゃんの所に行って、マナちゃんを連れてどこかに避難しよう

う。他の特待生の子も連れて行けたら連れて行こう。

まずはここから脱出しよう。そう思って考えを張り巡らせていると、空気が一変したことに気が付く。

身体がガクガクと震えて、逃げようとした意識が萎え萎んでいくよ
うな、そんな感じ。

「流石においたが過ぎましたよ」

その下手人である女、トウコが顔を能面のように無表情にしてこちらへと歩み寄ってくる。

……に、逃げないと。これは、不味い。捕まったら、駄目にされる。
本能的に分かってしまう。

「わたくし、親切に仇で返されるのが、最も嫌いですよ」

怒気を露わにするトウコは、今、完全にキレていた。

ついにオレは1ミリも動くこと叶わず、トウコが目の前に立ち塞がる。そして、オレの両頬に手を添えると拒む間もなく、オレの唇と自らの唇を重ねてきた。

「ぶちゅっ♡ ちゅばっ♡ ぢゅるっ♡ ぢゅぞぞっ♡」

「んうううっ!?!♡ んっ!♡ んんんんっ!?!♡ んーっ♡ んんんん
♡」

口内に侵入してきた舌が、オレを一瞬にして蕩けさせた。

すごい♡ なに、これ♡ 何も出来ない♡ 何も、考えられなくさせられる♡

断続的な快感に腰を震わせて、内股にした太ももへとドロドロの愛液と吹き散らかされるイキ潮が滴って地面のカーペットに染みを作る。

「ぶはっ♡」

「はあっ♡ はあっ♡ も、もうやめ♡」

「あむっ♡ ぢゅぞるるっ♡ ぢゅぱっ♡ ぶちゅっ♡」

「んんー！?!♡ んーっ！♡ はぶっ♡ んむううっ!?!♡」

…あー、始まった。トウコのお仕置ベロチュー

…これされたメスって、みんなおまんこ自分で差し出すようになって
ちやうよね

…まあ、もうチェックメイト寸前だったし、この娘もこれでアウト
でしょうね

「んっ♡ んううっ♡ んんんんんんっ!!♡」

「…ぶはっ♡ あら、シヨンベン漏らして気絶する程気持ち良かった
たんですね♡」

気が遠くなるほど続くキスとも言えないような、貪るようなベロ
セックスに、オレはいつの間にか意識を手放してしまった。

6

「おっ!?!♡♡」

いきなりの痛みすら伴うような強い快感に叩き起される。

どうやら気絶してしまったオレは、トウコに膝枕をされてしまった
いたらしい。先程までの怒気はナリを潜め、いつもの優しげな笑みを
浮かべながら、オレの髪の毛を手で漉いている。

「起きたみたいですね♡」

「あ、あれ…」

「ほら♡」

ぺちんっ♡と何かが頬を叩く。熱くて、変な臭いがする。

これはなんだろうか。寝ぼけた頭で、すんすんと臭いを嗅いだのがいけなかった。

その臭いを嗅いだ瞬間、下腹部から登ってきた快感の波に、気が付けばオレは暖かな液体を漏らしながら浅くイッていた。

「あ♡ ああああ♡」

「あらあら♡ おペニスの臭いで発情しておしっこ漏らすなんて、すっかり嬉ション癪が付いてしまったようですわね♡」

：完全にメスの顔でおハーブ生えますわね

：私も嬉ションさせてあげたいですね

：流石におちんぽの臭い嗅いでおまんこ弄り出しちゃったら、もうお終いね

流れるコメントを見てハツとする。

無意識に股間に伸びていた手が、おまんこをぐちやぐちや♡と弄り、浅ましく快感を求めている。

それが恥ずかしくて、手遅れな感じがして、知らぬ間に涙が出てしまふ。

「うっ♡ いや、なのに♡ おまんこ、いじるのやめられない♡」

「よしよし♡ それがメスとして正しいことですよ♡」
「ひぐっ♡ あ♡ あたま、なでるなあ♡」

…しおらしくなってしまうって、まあ

：やっぱり生意気でも本性は女の子ですね
：この場合はメスだよねー

しばらく頭を撫でられると、落ち着いてきて、今度は羞恥心に襲われる。

すると、トウゴが撫でる手を止めて口を開いた。

「これを挿入したら、貴女はメスになりますわ」

「……っ！」

そう言って、正直言っただけの前世のモノより2倍近く大きいおちんぽを見せてくる。

ムワツとした熱気と、滴る先走り汁が、早くオレの中に入りたいと懇願しているみたいで無性に恥ずかしい。それに、本当は嫌なのに、どこか嬉しくも思ってしまったているのが、もう訳が分からなくてどうにかなくなってしまいそうだった。

「そ、そんなの♡ 入れるわけ、ないだろ♡」

「ふふ♡ それは貴女の自由ですわ♡ もし、挿入しないと言うのであれば、またキスして差し上げて、その後にもう一度聞きますから♡」
「〜っ♡」

「まだまだ、たあっぷり♡ 時間はありますもの♡」

先程のキスを思い出して、快感と恐怖に震える。
唇をなぞりながら、オレは押し黙った。

あんなのをもう一回されたら、おかしくなる♡

「ほら♡ ほら♡」

「そ、そんな臭いものでたたくなあ……♡」

「そうですねえ♡ 言っただけですけど、これが最後の機会で

はありませんことよ♡ また定期的に生配信はしますから、その度にチャンスはありますわ♡」

「……そ、そうなの、か……?」
「ええ♡」

まだ次がある。次があるから、今回はこの快楽に溺れて良い。

……こ、今回は諦めて、また次回に頑張った方が良い♡ うん♡
きつとそうだ♡ だから、早く、早く終わらせよう♡ こんな無駄な時間は、良くない♡ おまんこに良くない♡

「ほら♡ 何か、言うことがあるでしょう?」

「……う、うう……はい……♡」

ほ、本当に、生配信されてる中で言うのか? オレが?

……そんなの……そんなの……♡

…あーあ

…堕ちましたね

…調教済みなのに一時間持ったんだし上々じゃないかしら?

オレは開脚すると、自ら見せ付けるようにおまんこをくぱあ♡と開いて、トウコへと願う。終わりの言葉を、口にする。

あ♡ ダメだ♡ これ♡ 言ったら、本当に男として終わっちゃう♡
待って♡ だめ♡ 言うな♡ 言わないで♡ ……あ♡

「……オ、オレは、トウコ……トウコお姉様の、んっ♡ 従順な姉妹メス奴隷です♡ ど、どうか、その逞しいおちゃんぽ様を、オレのおまんこに恵んでくださいませ♡」

「ええ♡ もちろんですわ♡」

：おー

：見事なメス堕ち懇願ですわね

：やっぱり、メスはここまでが1セットですわね

「これで、今宵のイブキはわたくしだけのメス穴♡ さあ、楽しませて
もらいますわよ♡」

「…………ぐすっ、ううっ」

言つて、しまった。オレは女なんかじゃ……ましてや、メスなんか
じゃないのに……。

パリンっと、オレの心の何かが砕け散るような気がして、後悔と寂
しさと切なさど苦しさに心が埋め尽くされるより早く。

疼くオレのおまんこに、待ち侘びたおちんぽが挿入された。

瞬間、オレのありとあらゆる思考は、おちんぽが齎す快楽によって、
全て押し流されてしまった。

「んほおおおおっ!?!♡」

「よく言えましたわね、イブキ♡」

生臭い嬌声を上げて、両手両足でトウコお姉様をホールドする。

ただの挿入。一回のピストンにも満たないソレが、圧倒的過ぎる質
量で、オレがおちんぽを入れる穴しか能がない、ただのメス♡だつて
ことを教えてくれる。

これ♡ これだ♡ おちんぽ♡ おちんぽが欲しかったんだ♡
オレの中を埋めつくして♡ 元男だとかそういうの全部どうでも良
くさせてくれるこのおちんぽが♡ ずっと欲しかったんだ♡

「ふう♡ はっ♡ んふっ♡ とろとろであつっいの♡ すっごい

締め付け♡ 今日完全に堕ちるつもりで来たんですね♡」
「おっ♡ おほっ♡ ち、ちがうう♡ んおっ♡ そんな♡ つもり
じゃ、あっ♡ イクツ♡」

ぞりぞり♡とオレのおまんこの弱い部分を削るような動き。メス
としてよわよわなオレには、その攻めに耐えられない。

「おっほ♡ あはっ♡ んんうっ♡ おおんっ♡」
「やつぱり、イブキは下品にアヘアへ言ってる方がお似合いですわよ
♡」

おまんこの奥を執拗に突き回されると、自然と口が窄まって、オレ
の口から出たとは思えないような下品な喘ぎ声が漏れてしまう。

「おっ♡ おっ♡ んおっ♡ あ、イクツ♡ いくっ♡ イツクウウ
!♡」
「もう、シヨンベンだか潮だか、それとも愛液なんだか分からなくなっ
て来ましたわね♡」

：もう完全に私達は蚊帳の外ですね
：あんなドスケベなおちんぼ懇願されたら、私も収まらないよー
：くう、今すぐにも押し掛けて、あのピンクなケツ穴にぶち込み
たい
：アナルのすぐ側にホクロがあるの、エッチ

お尻をカメラに向けての種付けプレス体勢のせいで、オレの恥ずか
しいところ、ケツの穴がくぱくぱ♡しているのが丸見えになってし
まっている。

恥ずかしさでおかしくなりそうだが、そんな気さえ、おまんこへの

プレスで容易く霧散させられる。

「おっほ♡　そ、そこ♡　ゴリゴリって♡　されるとお!♡　あ♡
あああ!♡　ひぐっ♡　イぐうっ!♡」

「ここが好きなんですのね♡　組み敷かれるのが好きなんて、やっぱり、メス以外の何者でもないですわ♡」

「やだやだやだ♡　ほ、ほんとはあ♡　メスなんか♡　なりたくない♡　んてないのおお!♡」

「もう手遅れですよ♡　後で、『ドスケベ生意気クール美少女わからせ』のAVを観ながらパコりますわよ♡　もちろん、主演はイブキとわたくしですわ♡」

「……♡　そ、そんなの、ぜったいみない♡　みないからあ♡」

それって、オレがどれだけ無様で惨めではしたなくて下品でドスケベなのか丸わかりの、この生配信のことじゃないか♡　そんな物を観直しながらセックスだなんて♡　歪む♡　性癖歪む♡　こうやって、プライドズタボロにされてわからされるの♡　癖になっちゃう♡

「うぐっ!?!♡　い、いきなり締め付けるの、本当におやめなさいな!♡

わたくしのおペニスに悪いですわよ♡」

「だ、だってえ♡　そ、そうぞうしたらあ♡」

「ふふ♡　想像しておまんこ締めるなんて♡　やっぱり、イブキは変態ですのね♡　それじゃあ、遠慮なく、一発目ドピュリますわよ♡」

「え♡　ちよ、ま♡　おうっ!?!♡」

オレの制止の声を無視して、トウコの全力ピストンが始まる。

オレのことなんか、俺のおまんこのことなんか全く考慮してない、ザーメンを排出する為だけの自分本位なセックス。

……なのに♡　なのに♡

「なんでえ!?! ♡ なんでこんなに気持ちいいのほお!?! ♡」

「わたくしのおペニスと、イブキのおまんこが相思相愛だからですよ ♡ あー ♡ 気持ち良いですわあ ♡」

「あああああ ♡ らんぼうセックスだめ! ♡ きもちよくなりすぎちやうからああ!?! ♡」

「気持ちよくなって良いんですのよ ♡ だって、わたくしとイブキはオスとメス、番なのですから ♡」

オスとメス ♡ 番 ♡ 夫婦 ♡

こんな、遅しくて強くて、オレのくそ雑魚おまんこを容赦なくボコボコにして気持ちよくしてくれるおちんぽ様と、トウコお姉様と番だなんて ♡

……そんなの、幸せ過ぎるのお ♡

「はあああ ♡」

「もう ♡ またシヨンベンチビったんですのね ♡ 粗相は治らなそうで、やっぱり少し心配ですわ ♡」

「ごめ ♡ ごめんなさひい ♡ でも ♡ でも ♡ イキすぎて ♡ うれしすぎて ♡ おしっこ、とまんこやいんですう ♡」

恍惚とした気持ちのままに、緩みきった尿道から暖かな液体が漏れ出て、アンモニア臭を漂わせる。

イキ過ぎて、水浸しになっているベッドの上で、オレは更なる醜態を晒しながらも、心の中ではどこか満たされていた。

「そんな、可愛くて悪い子には、お仕置とご褒美のダブルピストンですわ ♡」

「あ ♡ おっ ♡ らめっ ♡ そんなのらめっ ♡ もっとほしくて ♡ もっともっと、かわいくてわるいこになっちやうからあ!?! ♡」

…あー、これはダメだ

…そんなこと言われたら……うっ

…流石のトウゴでも、これはアウトだろうなあ

「くっつ!?!♡ もう!♡ もうもう!♡ どこまでわたくしを滾らせれば気が済むんですの!?!♡ この!♡ この、メスガキツ!♡ イケツ♡ わたくしのピストンでイキ死ねっ!♡」

「あっ♡ いくっ♡ ずっとイクツ♡ おねえさまのピストンでオレ、イクのとまらにやいよいよ!!♡」

降りることなく、ずっと絶頂が押し寄せてくる。

噴水のように潮が吹き散らかって、それでも、なお、オレのおまんこを蹂躪するピストンは終わらない。それどころか、段々と余裕のなさが増してきて、更に加速していく。

その度に、オレのおまんこは嬉しさでトウゴお姉様のおちんぽに絡み付き、締め上げ続ける。

「うっ♡ そ、ろそろ……♡ まずいですわね♡」

「……だして、ください♡ おねえさまのあかちゃんなら、はらみますからっ!♡ だしてっ!♡ ザーメンだひてくらさいっ!♡」

…ここで種付け懇願は卑怯

…生意気クール娘は一転すると、ドロドロ甘えんぼ娘になりますから。仕方ないですわ

…イブキママの子供の名前は、私が決めます!

「……言質は取りましたわよ。絶対に責任は取りますから、わたくしのロイヤルザーメンで孕みなさいっ♡」

「はいっ♡ はいっ♡」

アへ顔のまま、もう一度トウコお姉様を全身でホールドして何度も頷く。

好きな人の子供を孕む。これが、メスとして正しい在り方。オレの本当の在り方なんだ。

——トウコお姉様の為なら、オレは女で、メスで良い♡

「ふっふっふっ♡ もうそろそろイきますわよ♡ 覚悟は良くて？♡」

「……ふぁい♡ もちろんです♡」

フィニッシュに向けて、トウコお姉様のピストンが速まる。オレの子宮口を亀頭で何度も耕し、孕む準備を万端にさせてくる。

オレは、トウコお姉様のザーメンを今か今かとまちわびて、子宮口は勝手に開いてしまう。

「完璧ですわね♡ はあっ♡ はあっ♡ ザーメン登ってきましたわ♡ これは、ぶっ濃いですわよ♡ 妊娠確定ですわ！♡ 受け止めなさいー！♡」

「ひいっ♡ うけとめましゅっ♡ おまんこにロイヤルザーメンためこんで、らんしぜんぶじゅせいさせちやいましゅっ♡」

「良い心がけですわ！♡ も♡ もう限界っ♡」
「っっっ！♡」

最後の一突きが子宮口を突き抜けて子宮内に亀頭を侵入させる。

その埒外の快樂で、オレは不細工なアへ顔を晒して絶頂し——

「射精るッ！！♡ 精子、ドピユる！♡ 孕め、イブキっ！♡」
「んっほおおおおお！？♡ いぐっ♡ じゅせいアクメ、いっくううっ！！♡」

——トウコお姉様専用のオレの赤ちゃんの部屋に、熱々の子種汁が解き放たれ、オレは人生で最も深く、最も大きな絶頂を味わった。
ビクンビクンと身体が跳ねて、潮吹きを何度しても、浅いイキと深いイキが交互に来てイクのが終わらない♡

「こんなに濃いのは初めてですわ……」

「あっ♡」

「そんな寂しそうな顔しなくても、後でもつとぶち犯して差し上げますわ♡ わたくしのイブキ♡」

「〜っ♡」

やつと落ち着いて、しばらく放心状態でいると、トウコお姉様がおちんぼを引き抜いてしまう。

オレの心中を察してくれたトウコお姉様の優しげな手のひらがオレの頭を撫でて、おちんぼが抜けたせいで生まれてしまった喪失感を埋めてくれた。

：素晴らしい百合を見た

：トウコもとうとうお姉様かあ

：イブキちゃんを末永く可愛がってあげてね

「もちろんですわ♡」

「トウコお姉様あ……♡」

「まだまだ今夜は始まったばかりでしょ♡ さあ、第二ラウンド開始ですわ♡」

そう言うトウコお姉様の顔は、どこまでも凛々しく雄々しくて。ただのメスでしかないオレは、おまんこがきゅんきゅん♡するのを

止められなかった。

7

夏休みも終わり、今日でこの学院に来て半年になる。家には帰っていない。ずっと、寮部屋であの人と一緒にだったから。

あの後、オレがどうなったか？

……そんなの、決まってるだろ♡

「イブキ、奇遇ね」

「あ、トウコお姉様！」

目敏くその姿を向けたオレが駆け寄って抱き着くと、愛しのトウコお姉様はオレの頭を優しく撫でてくれる。

夏休みの連続交尾や露出調教、オレのメス堕ち生配信を観ながら完堕ちしてしまったらしいマナちゃんといイ先輩を交えたオレのアナル開発大会なんかもあって、完全にメスとして覚醒させられたオレの身体。常に発情状態で疼きが止まらないが、それも、こうしてトウコお姉様を見てしまうともう大変。

我慢が出来なくなったオレは、トウコお姉様の手を胸に挟んではしたなく腰を揺らしながら、潤んだ眼を向けてトウコお姉様に懇願する。

「きよ、今日も、その……オレをメスにしてくれ、トウコお姉様♡」

「ふふ♡ もちろんよ、イブキ♡」

男だなんだと言い張っていた頃の自分が哀れで、すぐにでもメスになることの喜びを知っていれば良かったのにと、今では黒歴史寸前の後悔の記憶だ。

オレに、こんな喜びを教えてくれたこと、両親には感謝している。このお腹の子の名前はあの二人に決めてもらおうつもりだ。

でも、それまでは――

「大好きだぞ、トウコお姉様……いや、あなた♡」
「ええ♡ わたくしもですわ、イブキ♡」

——今日も、オレはお姉様兼旦那様のふたなりチンポで女に、メスにされる。

それが何よりも幸せだった。